
in plastic bag

エイノジ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

in plastic bag

【Zコード】

N7917Y

【作者名】

エイノジ

【あらすじ】

とある火曜日。

設楽はマンションの下にゴミを出しに行くと、袋に入った成人男性を見つける。

このままでは燃やされる、マズイと思った設楽は自宅に持ち帰る。仕事から帰宅した設楽は人間とは思えないゴミに手を焼くが、次第に愛情が湧いてくる……

? (前書き)

設楽統…保健所に勤める28歳。好奇心が強く、またドS。

有吉弘行…設楽のマンションのゴミステーションに捨てられていた「！」。27歳。

自己は犬だと催眠がかかつている。

日村…設楽の同僚。設楽とロッカーが隣。テンションが高く、親しみやすい。

小木…冷静で淡白。矢作が好き。現在矢作と同居中。

矢作…動物と小木が好き。多少のホモツ氣がある。

?

早朝、今日は火曜日だから燃えるゴミの日。

家の紙くずと生ゴミを集め、一つの大きな袋に纏める。

汚れないように捲り上げた袖。

だぼつとしたスウェット。

すぐに脱げるサンダル。

まだ整えていない髪を搔き上げながらマンションのゴミステーションに行く。

既に数個の塊があった。

ネットを持ち、俺のゴミも入れようとした瞬間、見慣れた形が半透明のビニールに包まれて置いてあった。

正確には捨てられていた。

体育座りをした成人男性が眠っている…ように見える。

事件だ！と俺は即座に思ったが、怖いもの見たさに、持っていた袋を置き、頬に触れてみる。

「あ…っ」

生きている。

ビニール越しに体温が指に伝わった。

「ちょっと待てよ…。今日は火曜日だろ？ ということは燃えるゴミの日であって、更に俺はここにゴミを捨てに来たんだ」

俺の持ってきたゴミはやがて収集車が来て、焼却炉にぼーんだ。ゴイツ、骨だけになるぞ。

生きたまま燃やされるとか、熱いじろりの騒ぎじゃねえって。

「よいしょ…っと……」

意外と重いのね。

持ち帰ったのはいいけど、俺誘拐罪とかで捕まらないよね？

「俺が誘拐犯ならコイツは露出魔つてところか

「ゴミ袋に入ったパンツ一丁の青年（とこひね年をとつすがてこむ）

を解放した。

傷が所々に入つていて、でもそれ以外に不審なところは何もない。

「いやでも捨てられてたよなあ」

あ、ヤバイヤバイ。

仕事に遅れちゃう。

青年をソファーに運び、着替えて髪をセットして出でいった。

知らない人を家に置いとくなんて無用心かもしないけど、その人
だつて知らない家に居るんだから、ビビつて何も出来ないよね。

「おざまーす」

「おお」

俺が着いた時には小木さんと矢作さんはもう居て、一人とも煙草を
ふかしながら雑談に勤しんでいた。

軽く手を上げて挨拶を交わし、俺はロッカーに着替えて行つた。
隣のロッカーの田村さんからゴミユニーケーションを取つてきた。

「あれ設楽さん遅かったね」

「うん。今日ゴミ出しの日だったから」

「え、何それ。ゴミ出すのに何分掛けてんの」

捨てるだけじゃなかつたからね。

まさかゴミを捨てに行つて、拾つとは思わないでしょ。

「あ、もしかして捨ててあるもの拾つたとか？ そりでしょ、絶対そ
うだ！」

「いや、まあ拾つたといつかね……」

勘が鋭いんだから。

「ちょっと待つて。俺が当てるね。大きいものでしょ……」

「うん、まあ…大きいものかな」

「じゃあねえ…家電だ…！…そうでしょ、しかもスピーカー系じゃない？」

「いや、違うな…」

「大きくて家電で、スピーカー系じゃないとなると…」

いやいや。

「あの、田村さんちょっとといい？」

「ん? 何? あ、答え言っちゃダメだよ?」

「あ、そうじゃなくてね。家電じゃあ、無いんだよな」

「えつ? 大きいものつて…家電、」

「大きいものとは言つたけど、家電とは言つてないからね。それに今日火曜日じゃん」

「うん、火曜日だよ」

「火曜日つてことは、燃えるゴミの日だから、家電とかの粗大ゴミは出しちゃいけないから」

不思議な顔（言い方に語弊がある? 気にすんな）をしていた田村さんは理解できたようだ。

「あー、そう言えばそつだよね。成程ー。じゃあタンスとか? タンスも燃やさないかなあ、と思つたところで仕事が始まるベルが鳴つた。

俺の仕事は保健所の、主に動物保護。

地域住民の方から苦情とも取れる連絡があつた動物を一時的に保護している。

一定期間待つても飼い主とか現れなかつたら、惨いけど殺したりもする。

でも、何でもかんでも殺したりしないよ。

最初は気持ち悪くて吐いてたけど、人の慣れつて恐ろしいね。

そういう仕事があつた晩でも焼き肉食べたりするもん。

「おーよしよし、小木は可愛いねー」

また矢作さんの“小木ペツト”が始まった。

保護した野犬達に朝ご飯を与える時、小木さんが矢作さんに思いつきり甘える（動物に嫉妬か？）。

ほんと気持ち悪いくらいに…。

「小木は可愛いねー。ほんと食べちゃいたいよ」

昔はこれにも吐きそうになつてたけど、人間の慣れつて怖いですね。

「おい、食べな」

小さなケージに大きな体を丸めてうずくまるドーベルマン。

ここに来てから丸2日。何にも食べちゃいない。

スレンダーな体が貧相にさえ見える。

「食べなきや死ぬよ」

ドーベルマンなんて捨てる飼い主、信じられないよ。

こんな恐ろしい目をした犬、責任持つて最後まで育ててくれなきや、
捨つ身にもなつてみろつてんだ。

「俺の飯食うくらいだつたら死んだ方がマシだつてか？」

なあ、いつまでも意地張つてんなよ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7917y/>

in plastic bag

2011年11月23日16時45分発行